

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：13101

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H04773

研究課題名（和文）北東ユーラシアチュルク系諸言語の研究：分岐と接触の歴史的過程の解明

研究課題名（英文）Research on North-East Turkic Languages:: Structural Divergence and Language Contact

研究代表者

江畑 冬生 (Ebata, Fuyuki)

新潟大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：80709874

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題ではユーラシア大陸の東西に広がるチュルク諸語のうち北東語群に分類される諸言語を研究対象として、形態音韻プロセスや文法形式の生産性・義務性にも着目しながら、共時的な文法構造の記述と相互分岐と相互接触による歴史的変遷の解明を試みた。その中でも主としてサハ語・トゥバ語・ハカス語という3つの未解明言語に焦点をあて、現地調査とコーパス調査の両方を活用しながら、形態音韻規則・文法形式の義務性・形態法上の特徴・ボイス接辞の用法・証拠性関連接辞の用法・膠着性の度合い・格接辞の用法などに関する記述的・対照言語学的研究において新たな成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

チュルク諸語のうち北東語群に分類される諸言語は、その内部の歴史的関係が明らかになっていない。これは、研究量そのものが乏しいことと、過去の言語の姿の手掛かりとなる歴史的な文献資料が乏しいことによる。本研究課題により、北東語群に属する諸言語が、相互分岐と相互接触を繰り返しながら文法構造を変容させてきた歴史的過程の一端が明らかになった。韓国やロシアの研究者らとの国際共同研究という側面においても、顕著な進展が見られた。研究成果は学会発表や学術論文として発表するだけでなく、新潟大学・鶴見大学・富山大学・北海道大学・大東文化大学などで一般向け講演としても公表することができた。

研究成果の概要（英文）：This research project targets the languages classified into the Northeastern group of the Turkic language family, and aims to describe the grammatical structures and to explore the language change process through language contact especially focusing on their morphophonological processes and productivity and obligatoriness of grammatical elements. This project particularly investigate the three minority languages Sakha, Tyvan, and Khakas, and tries to illustrate morphophonological rules, obligatoriness of grammatical elements, morphological characteristics, use of the voice suffixes, use of the so-called evidential suffix, degree of agglutinateness, and use of case suffixes using a descriptive and typological approach.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学 言語類型論 対照言語学 チュルク諸語 形態音韻規則 形態法 膠着性 証拠性

1. 研究開始当初の背景

チュルク諸語とは、ユーラシア大陸の東西に分布する 30 余りの同系言語群を指す。これらの言語はさらに、(チュヴァン語やハラジ語のような他と隔絶しているものを除き) 歴史的関係の深さにより次のような 4 つのグループに下位分類される: 南西語群 (Oghuz)、南東語群 (Uyghur)、北西語群 (Kipchak)、北東語群 (Siberian)。南西語群・南東語群・北西語群の 3 つのグループに属する諸言語の研究水準は比較的高く、グループ内に属する言語同士の歴史的関係性についてもある程度は把握されている。しかしながら他の 3 つのグループとは異なり、「北東語群」は実際には言語の歴史的な近親関係を反映させた分類とは言えない。現状では、北東グループとは単に地理的分布から便宜的にまとめられた分類に過ぎない。しかも北東語群に属する諸言語の研究は大幅に遅れており、世界でも申請者を含む数名のみが研究を行っている。言い換えれば、北東グループ内に属する諸言語の歴史的関係は、未だに明らかになっていない。

従来の研究の問題点は、単に表面上の語彙形式や文法形式の有無のみに着目していた点にある。本研究課題では、形態音韻プロセスや文法形式の生産性・義務性など言語のダイナミックな側面にもアプローチしていくことで、チュルク諸語北東グループ諸言語の相互分岐と相互接触による歴史的変遷の解明を試みることを目指す。

2. 研究の目的

本研究課題は、ユーラシア大陸の東西に広がるチュルク諸語のうち北東グループに分類される諸言語(特にサハ語・トゥバ語・ハカス語の 3 つ)を研究対象とし、以下の 3 つの点を中心とする課題に取り組むことを目的としている。

- (1) 未解明部分の大きいトゥバ語・ハカス語の文法構造を、現地調査を行い包括的に記述すること。
- (2) 周辺の非チュルク諸語とも対照しながら、北東グループ諸言語の文法構造間の相違点と類似点を検証すること。
- (3) 古代チュルク語資料との比較を通して、北東グループ諸言語が相互分岐と相互接触を繰り返しながら文法構造を変容させてきた歴史的過程を解明すること。

3. 研究の方法

本研究課題を遂行するにあたっての具体的な方法は、以下の通りである。

- (1) ロシア連邦のトゥバ共和国およびハカス共和国に赴き、トゥバ語およびハカス語の音韻構造・文法構造に関する現地調査を行う。特に、音韻規則(形態音韻的交替、アクセント規則、母音調和規則)、屈折形態法(格標示・所有標示・人称標示の義務性)、派生形態法(出勤名詞の生産性・出名動詞の生産性および統語的単位を入力としうるか)、形態統語法(文法要素の明示性および義務性)の各項目について重点的に調査を行う。
- (2) オンライン新聞記事等を元にトゥバ語・ハカス語のコーパス資料を作成・拡充し、PC を用いてコーパス資料の形態統語的分析を進める。両言語のコーパス資料は、トゥバ語新聞 Шын のオンライン版およびハカス語新聞 Хабар のオンライン版に基づき作成する。
- (3) 古代チュルク語資料との比較を行い、現地調査により明らかにしてきた北東グループ諸言語の文法構造と対照し、チュルク諸語北東グループの歴史的変遷の解明を完成させる。

4. 研究成果

本研究課題では、チュルク諸語北東グループの記述的研究が大きく進展し、かつ同グループに属する言語間の対照研究を行うことで、類似点と相違点が明らかになった。さらに古代チュルク語を含む同系言語との対照を行った結果、北東語群に属する諸言語が相互分岐と相互接触を繰り返しながら文法構造を変容させてきた歴史的過程の一端が明らかになった。韓国やロシアの研究者らとの国際共同研究という側面においても、顕著な進展が見られた。

研究期間における各年度ごとの主な研究内容および得られた研究成果は、以下の通りである。

- (1) 2017 年度(平成 29 年度・1 年目)には、北東ユーラシアチュルク系諸言語の共時的相違と通時的変遷に関して、主として 2 つの側面から研究を行った。共時的相違点としては、主としてボイス接辞による派生動詞と受身・再帰・逆使役構文に関する解明を行い、通時的変遷としては、主としてチュルク諸語の処格と分格をめぐる用法の発展に関する解明を行った。この年度

の主な研究成果は、2017年6月の日本言語学会第154回大会における口頭発表「トゥバ語の再帰」や、2018年3月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された国際学会“Current Topics in Turkic Linguistics”におけるサハ語の分格の歴史の変遷に関する口頭発表などである。またアウトリーチ活動として、2018年3月に新潟大学において講演会「シベリアでの少数民族言語調査」を主催し、「フィールドワークによる言語調査：北東アジアの事例から」と題する講演を行った。

- (2) 2018年度(平成30年度・2年目)には、北東ユーラシアチュルク系諸言語の共時的相違と通時的変遷に関して、主として2つの側面から研究を行った。共時的相違点としては、述語に付加される接辞要素に関する研究を行い、サハ語・トゥバ語の疑問詞疑問接辞の相違点を明らかにした。加えてトゥバ語の証拠性を表すとされる接辞の用法に関して、話し手・聞き手の認識からの解明を行った。通時的変遷としては、サハ語が周囲のツングース諸語との接触により言語特徴を変えたことを、トゥバ語との対照により示した。年度の前半には、本研究課題を基課題とする科学研究費・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化)によって韓国・ソウル大学に滞在し研究活動を行うことができた。この年度の主な研究成果は、2018年6月の日本言語学会第156回大会・同年11月の第157回大会における口頭発表や、2018年11月に新潟大学において主催した国際ワークショップ「北東ユーラシア諸言語の記述と対照2」などである。またアウトリーチ活動として、講演会「シベリアの文化に触れてみる」(鶴見大学)において「サハとトゥバの言語と文化」と題する講演を行った。
- (3) 2019年度(平成31年度・3年目)には、周辺の系統の異なる言語も視野に入れた対照を通じて、北東ユーラシアチュルク系諸言語の共時的側面と通時的変遷に関して主として3つの側面から研究を行った。第1に、サハ語とトゥバ語の主題マーカ―の用法を対照した。第2に、サハ語とトゥバ語の形態法における膠着性・複統合性の性質を、他の北東ユーラシア諸言語と対照することで明らかにした。第3に、サハ語文法の全体像を、類型論的特異性と系統的・地理的特質の両面からまとめた。この年度の主な研究成果は、2019年4月に新潟大学において主催した国際ワークショップ「北東ユーラシア諸言語の記述と対照3」、2019年11月の日本北方言語学会第2回大会における口頭発表、2019年12月の韓国語学会60周年記念冬季学術大会での講演、2020年3月に出版した単著『サハ語文法：統語的派生と言語類型論的特異性』などである。またアウトリーチ活動として、リレー講演「北の先住民言語 北東アジアから北米まで」(富山大学)においてアルタイ諸語とその文化に関する講演を行った。
- (4) 2020年度(令和2年度・4年目)には、言語類型論的な特異性にも着目しながら北東ユーラシアチュルク系諸言語の証拠性・自己性・所有構造に関する研究を行った。第1に、サハ語の過去時制における証拠性表現の特質を明らかにした。第2に、トゥバ語における証拠性と自己性に関して記述するとともに類型論的な位置づけを行った。第3に、サハ語の所有構造の類型と意味的特徴の相関を示した。当初は本年度が研究課題の最終年度となる予定であったが、前年度末からの新型コロナウイルス感染症問題が改善しないため、当初の予定を変更し年度末には研究期間の延長申請を行った。8月に予定していた現地調査を断念するなど、日本国内に限った研究活動を余儀なくされた。この年度の主な研究成果は、2020年12月の2020世界韓国語大会および2021年1月の韓国言語類型論学会第13回国際学術大会における講演(いずれもオンライン参加)などである。アウトリーチ活動として、2020年9月の北海道大学アイヌ・先住民研究センターでの講演会「フィールド言語学とフィールド言語学者のダイバーシティ」において「サハ語の現在から過去を押し量るには」と題する講演を行った。
- (5) 研究期間の延長を行った2021年度(令和3年度・5年目)には、主として北東ユーラシアチュルク系諸言語の語彙対照・形態音韻論・格形式に関する研究を行うとともに、これまでの研究成果の総括を行った。第1に、サハ語とトゥバ語の語彙対照を行い、音韻対応・語形対応・意味のずれに関する整理を行った。第2に、チュルク語北東語群における接辞頭子音交替を検討し、言語ごとの交替パターンの違いを示した。第3に、チュルク語の所格接辞からサハ語の分格接辞に至る変遷に関して、周辺のチュルク語および非チュルク語における格形式との対照からの検討を行った。この年度の主な研究成果は、2021年4月に東京外国語大学で開催された「宮岡文庫」開設記念特別企画公開シンポジウム「地球規模の言語研究から日本語を再考する」での講演(オンライン参加)、2021年6月の雲南民族大学での講演(オンライン参加)、2021年7月の韓国アルタイ学会での口頭発表(オンライン参加)、2022年3月に刊行された論文「チュルク語北東語群の接辞頭子音交替」「サハ語とトゥバ語の語彙対照」などである。アウトリーチ活動として、2021年10月に大東文化大学で「シベリアの少数民族：サハとトゥバの言語と文化」と題する講演を行った(オンライン参加)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計19件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 4
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の対格標示と情報構造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 139-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 -
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の語彙対照	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北東アジア諸言語の記述と対照2	6. 最初と最後の頁 133-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 -
2. 論文標題 トゥバ語の形態音韻論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アルタイ諸言語を対象とした環境の変化と言語の変容に関する総合的研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 13
2. 論文標題 言語類型論から見た日本語形態法と統語的派生	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 23-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 12
2. 論文標題 チュルク語北東語群の接辞頭子音交替	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ebata, Fuyuki	4. 巻 -
2. 論文標題 From Turkic Locative to Sakha (Yakut) Partitive: A contrastive analysis with Tyvan, Tofa, Dolgan, and Evenki.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Aspects of Turkic Languages: Phonology, Morphosyntax and Semantics	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 3
2. 論文標題 サハ語における証拠性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 3
2. 論文標題 トゥバ語における証拠性と自己性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 -
2. 論文標題 サハ語(ヤクート語)の所有構造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 津曲敏郎先生古稀記念集	6. 最初と最後の頁 214-226
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 2
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の主題マーカ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ebata, Fuyuki	4. 巻 10
2. 論文標題 Agglutinateness, polysynthesis and syntactic derivation in Northeastern Eurasian languages.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 1
2. 論文標題 サハ語の数量詞句	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 1
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の疑問詞疑問接辞の対照	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北東アジア諸言語の記述と対照	6. 最初と最後の頁 167-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ebata, Fuyuki	4. 巻 13
2. 論文標題 Regularity and obligatoriness in Sakha (Yakut). A contrastive analysis with Tyvan.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア・アフリカの言語と言語学	6. 最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 9
2. 論文標題 トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dirの機能：話し手・聞き手の認識からの説明	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 39
2. 論文標題 統語的要素を含む派生に見る語彙的緊密性 (lexical integrity) の問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学言語学論集	6. 最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 8
2. 論文標題 トゥバ語の再帰	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 81-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 9
2. 論文標題 表音文字の非表音性：サハ語と現代韓国語の対照を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 20
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の受身と再帰	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ユーラシア諸言語の多様性と動態 - 20号記念号 -	6. 最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 Contribution from descriptive and contrastive approach to historical study: A case from the Turkic language family.
3. 学会等名 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki and Arzhaana Syuryun
2. 発表標題 A contrastive study on the WH-question suffixes in Sakha and Tyvan.
3. 学会等名 The 14th Seoul International Altaistic Conference” Chonbuk National University, Korea. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 言語類型論・個別言語研究における証拠性：韓国語とトゥバ語を例に
3. 学会等名 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会 第11回公開発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 北東ユーラシア諸言語の膠着性・複統合性と統語的派生
3. 学会等名 日本北方言語学会第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 言語類型論と周辺諸言語から見た日本語形態法
3. 学会等名 日本語文法学会第20回大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 言語類型論から見たアルタイ諸言語と韓日語の形態法
3. 学会等名 韓国国語学会60周年記念冬季学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 The so-called evidential suffix -dir in Tyvan: Explanation from the perspective of the speaker's and the hearer's knowledge
3. 学会等名 韓国言語学会2018年度夏季学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dirの機能：話し手・聞き手の認識からの説明
3. 学会等名 日本言語学会第156回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 トゥバ語における疑問詞疑問接辞の否定文での用法：egophoricityからの説明
3. 学会等名 日本言語学会第157回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 Regularity and obligatoriness in Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Tyvan.
3. 学会等名 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 トゥバ語の文末接辞に関する整理
3. 学会等名 2018年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 トゥバ語の再帰
3. 学会等名 日本語学会第154回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 サハ語の連体修飾節 - 内容補充節での補文標識挿入に関する日本語との対照 -
3. 学会等名 Prosody and Grammar Festa 2
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Arzhaana Syuryun and Fuyuki Ebata
2. 発表標題 The so-called evidential suffix -dir in Tyvan
3. 学会等名 Current Topics in Turkic Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 From Turkic locative to Sakha partitive: A contrasting analysis with Tyvan, Tofa, Dolgan and Evenki
3. 学会等名 Current Topics in Turkic Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 江畑 冬生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 260
3. 書名 サハ語文法： 統語的派生と言語類型論の特異性	

1. 著者名 永山ゆかり、吉田睦	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 272
3. 書名 アジアとしてのシベリア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2	開催年 2018年～2018年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------